

本書の特長と利用法

■本書の特長

本書は、大学入試問題の実戦演習を目的として、難関国立大学の最近の個別試験問題から古文十五題・漢文七題の記述式の良問を精選した問題集です。

各問題の冒頭には、出題大学の試験時間・配点をもとに割り出した〈標準解答時間・配点〉と、難易度の目安〈★☆☆標準・★★☆やや難・★★★かなり難〉を表示してあります。別冊の〈解答・解説編〉には、詳細な〈解説〉と〈採点基準〉を掲載し、実戦的な演習ができるように編集してあります。

ここに収められた古文十五題・漢文七題と真摯に取り組むことで、難関国立大学を突破するために必要な、読解力と記述表現力を養い、志望校合格を果たされることを願ってやみません。

■本書の構成

〈古文・問題編〉〈漢文・問題編〉〈記述解答用紙〉〈解答・解説編〉の4冊子に分かれています。

■効果的な利用法

① まず、〈問題編〉の各回の最初に示した〈標準解答時間〉内で、ひととおり問題を解いてください。

——これは〈速く解く〉ための練習です。

② 次に、同じ問題について、時間を気にせず、もう一度じっくり読んでください。本文の理解が深まったところで、記述解答についても、よりよい解答にできないかどうか、考え直してみしましょう。

——これは〈きちんと考えて解く〉ための練習です。①と②とをくりかえすうちに、二つの力が結びつき、〈速く、きちんと考えて解く〉ことができるようになります。

③ 最後に、〈解答・解説編〉を見て、〈解答・採点基準・解説〉を参考に、自分の答案を採点・添削してみしましょう。

——これは、自分の答案の欠点を自分で見つけ、修正する練習です。この練習をくりかえし、〈自分の答案を添削する力〉をつけていくことが、つまりは記述表現力を高めることなのです。よりよい答案を書く力とは、試験時間中に自分の答案を添削できる力なのですから。

④ 知識を問う設問で誤ったものについては、その日のうちに復習し、覚えておくようにしましょう。読解を求める設問については、しばらく日をおいて〈解答・解説〉の内容を忘れかけたところに）もう一度同じ手順でやり直してみるのも効果的です。

古文編目次

第1回	今宵は赤坂にやどる。	〔出典〕	〔 〕は解説冊子の頁	〔出題大学〕
第2回	下わたり、品いやしからぬ人の、	〔帰家日記〕	4	大阪大学
第3回	むかし、惟喬 <small>これたが</small> の親王 <small>みこ</small> と申す親王	〔堤中納言物語〕	6	北海道大学
第4回	醍醐 <small>さくらみ</small> の桜会に、童舞おもしろき年	〔伊勢物語〕	8	大阪大学
第5回	文かく事は用広きわざにて、	〔古今著聞集〕	10	名古屋大学
第6回	平中が色好みけるさかりに、	〔織錦舎随筆〕	12	京都大学
第7回	世々の物知り人、また今の世に	〔大和物語〕	14	名古屋大学
第8回	内裏 <small>うち</small> より、夜まかでて、	〔玉勝間〕	18	九州大学
第9回	み吉野のたのむのかりも	〔四条宮下野集〕	20	名古屋大学
第10回	かくて、いとおもしろく	〔俊頼髓脳〕	22	九州大学
第11回	道のほど遙 <small>はる</small> くはげしき山道の	〔うつほ物語〕	24	東京大学
第12回	こゆるぎの磯 <small>いそ</small> ちかき苦屋 <small>くまや</small> の内にも、	〔源氏物語〕	26	東京大学
第13回	春の花のあした、秋の月の夕さり、	〔庚子道の記〕	28	東京大学
第14回	こはそもはかなき世なりけり。	〔北窓瑣談〕	30	東北大学
第15回	同盟の人々毎会右の如く	〔鶉衣〕	32	京都大学
		〔蘭学事始〕	34	一橋大学

第2回

『堤中納言物語』

☆☆☆

北大
解説6
ページ

25分

40点

次の文章は、『堤中納言物語』中の一篇『はいずみ』の冒頭部である。読んで設問に答えよ。

下わたりに、品いやしからぬ人の、こともかなはぬ人をにくからず思ひて、年ごろふるほどに、親しき人のもとへ行き通ひけるほどに、むすめを思ひかけて、みそかに通ひありきけり。めづらしければにや、はじめの人よりは心ざし深くおぼえて、人目もつつまず通ひければ、親聞きつけて、「年ごろの人を持ちたまへれども、いかがはせむ」とて、ゆるして住ます。もとの人聞きて、「今はかぎりなめり。通はせてなども、よもあらせじ」と思ひわたる。「行くべき所もがな。つらくなりはてぬ先に、離れなむ」と思ふ。されど、さるべき所もなし。今の人の親などは、おしたちていふやう、「妻などもなき人の、せちにいひしにあはすべきものを、かく本意にもあらでおはしそめてしを、くちをしけれど、いふかひなければ、かくてあらせたてまつるを、世の人々は、妻すゑたまへる人を、『思ふと、さいふとも、家^{~~~~~}にすゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ』などいふもやすからず。げに、さる^Aことにはべる」などいひければ、男、「人数にこそはべらねど、心ざしばかりはまさる人はべらじと思ふ。かしこには渡したてまつらぬを、[□]おろかにおぼさば、ただ今も渡したてまつらむ。いとことやうになむはべる」といへば、親、「さだにあらせたまへ」と、おしたちていへば、男、「あはれ、かれもいづちやらまし」とおぼえて、心のうちかなしけれども、今のがやごとなければ、^B「かくなどいひて、けしきも見む」と思ひて、もとの人のがり往ぬ。

10

5

(注) ○下わたり——平安京の南部。荒廃した場末のイメージがある。

○品いやしからぬ人——身分が低くはない人の意で、男性。

○こともかなはぬ人——生活が不如意な人の意で、女性。

○年ごろふるほどに——長年(夫婦として)暮らしているうちにの意。

問1 傍線部イ・ロ・ハを現代語に改めよ。

問2 波線部「家にすゑたる人」とはこの物語では誰のことか。その人物と同一の人物を指す別の表現を文中より五つ抜き出せ。

問3 二重傍線部A「さること」の具体的内容を七〇字以内でまとめよ。

問4 二重傍線部B「かく」の具体的内容を三〇字以内でまとめよ。

古文編2

『堤中納言物語』

得点

点

問
1

イ

☐

八

問
2

問
3

問
4

[illegible]

古文編2 『堤中納言物語』

解 答

問1 イ 行くのによいところがあるといいなあ。

ロ いい加減な態度だと思いいになるならば、
ハ どこに行かせようか。

問2 こともかなはぬ人 はじめの人 年ごろの人
もとの人 かれ

問3 世間の人が、男の態度について、ロでは娘を大切にす
ると言いながら、もとの妻のことを大切に思っている
と噂するのはもつともだということ。(67字)

問4 新しい妻の親に、娘を自宅に連れて行くように言われた
こと。(28字)

配点・採点基準

40点

問1 〈各5点〉

◇5点満点として、次の要素が満たされていなければ、マイナス3点。即ち、

一つ間違いがあれば2点。二つ以上間違いがあれば0点。

イ*「べき」が適当「…のによい」と訳してある。

▼「べき」は可能「…ことができる」と訳してあっても可。

*願望の終助詞「もがな」が「…ガアッテホシイナア」と訳してある。

▼「もがな」の訳は、「…ガアッテホシイ」「…ガアッタラナア」「…アレ
バナア」でも可。

ロ*「おろかに」が「いい加減だ」と訳してある。

▼「おろかに」の訳が、「粗略だ」「誠意がない」「不誠実な」でも可。

*「おぼさ」は「思ふ」の尊敬語として「お思いいなる」と訳してある。

▼「おぼさ」の訳は、「思いいなる」「お思いいなる」「お思いいなられる」
でも可。

*「ば」は「…ナラバ」と訳してある。

ハ*「いづち」を「どこに」「どこへ」と訳してある。

*「やる」を「行かせる」と訳してある。

*「や…まし」を「…ヨウカ」と訳してある。

▼「や…まし」は「…ヨウカシラ」「…タモノダロウカ」「…タラヨカロウ
カ」でも可。

問2 〈各2点〉

◇正答のみ可。その他は不可。

問3 〈10点〉

◇「さること」が、「男の態度について世間の人が噂するのをもつともだ」「世
間の人のいうとおりだ」という意味であることが書かれていれば、採点する。
以下、次の二点の条件を満たしていなければ、それぞれ減点する。

▼男の態度の具体的な内容として、「ロでは大切にするといいながら」とい
う要素がなければ、マイナス5点。

▼男の態度の具体的な内容として、「もとの妻のことを大切に思ってい
るように見える」という要素がなければ、マイナス5点。

問4 〈5点〉

◇新しい妻の親が男に、自分の娘を男の家に住まわせることを迫ったとい
うことが書かれていれば、正答と表現が多少異なっているでも、可。

▼「言われた」の部分については「親と約束した」「親に言ってしまった」「親
に宣言した」なども可。

▼「もとの妻に出て行ってほしいこと」「新しい妻がすぐに家に来るこ
と」などは、状況を十分に説明していないので、マイナス3点。

出典

『堤中納言物語』は、作者未詳。平安時代後期成立の短編物語十編と、物語冒頭部の断章一つが収められている。収められている物語の題名を挙げると、「花桜折る少将」「このついで」「虫めづる姫君」「ほどのどの懸想」「逢坂越えぬ権中納言」「貝あはせ」「思はぬ方にとまりする少将」「はなだの女御」「はいずみ」「よしなしごと」となる。「はいずみ」の内容は次の通り。男が新しい妻を迎えるというので、身寄りのないもとからの妻は家を去ったが、男はあわれを感じて呼び戻した。男が新しい妻の所に久しぶりに訪れると、油断していた新しい妻は、あわてて身支度をして、白粉と間違えて掃墨を顔に塗ってしまう。これによって、男の心は新しい妻から離れてしまう、というもの。

解説

問1 〈現代語訳〉

イ「行くべき」と「もがな」をそれぞれ正確に訳す。助動詞「べし」には様々な意味があるが、ここの「べき」は適当で「…ノニヨイ」と訳するのがよい。他に、可能の意で「…コトガデキル」と訳してもよい。「もがな」は願望の終助詞。「…デアルトイイナア」「…ガアルトイイナア」と訳す。「もがも」「もが」「がな」も、「もがな」と意味は同じ。

ロ「おろかに」と「おぼさば」をそれぞれ正確に訳す。「おろかに」の終止形は「おろかなり」。「おろかなり」は、「おろそかなり」と同じ。「おろそか」は物事が不完全・不十分な様子を表す。「おろかなり」も「おろそかなり」も「いい加減だ」と訳す。ここでは、男の新しい妻に対する態度を表すので、「いい加減だ」と訳するのが最もよいが、それを具体的に「不誠実だ」などと訳してもよい。「おぼさば」は、「おぼす」と「ば」に分解することができる。「おぼす」は「思ふ」の尊敬を表し、「お

思いになる」と訳す。敬語は、尊敬・謙譲・丁寧の区別をきちんと訳に反映させなければならない。「ば」は、ここでは未然形に接続しているので、仮定条件を表し「…ナラバ」と訳す。

ハ「いづち」と「やらまし」をそれぞれ正確に訳す。「いづち」は、場所を尋ねる疑問の副詞。「どこに」「どこへ」と訳す。「やらまし」は、「やら」と「まし」に分解することができる。「やる」は、漢字をあてると「遣る」となることから分かるように、人を「行かせる」、物を「送る」など、人や物を遠方に移動させることを意味する動詞。助動詞「まし」には、「…ましかば…まし」（モシ…タトシタラ、…ダロウニ）というかたちで用いられる反実仮想の用法の他に、「いかに」「いづれ」「や」などの疑問の意を表す語と共に用いられて、「…ヨウカ」というためらいを含んだ意志の用法がある。ここでは、「いづち」と共に用いられているので、後者のためらいを含んだ意志であると理解できる。

問2 〈人物整理〉

「家にすゑたる人」とは、男の家に住んでいる妻のこと。妻には、もとからの妻と新しい妻がいるが、男の家に住んでいるのはもとからの妻。新しい妻の親は、その妻の代わりに自分の娘を家に住まわせるように迫っているのである。もとからの妻を指すものをきちんと拾っていけば、正解となる。最初の「品いやしからぬ人」と「こともかなはぬ人」は同一人物なのか、別人物なのか迷うが、注をきちんと見ておけば、「品いやしからぬ人」が男、「こともかなはぬ人」がもとからの妻を指すことが分かる。

問3 〈内容説明〉

「さること」は、「そのようなこと」と訳す場合もあるが、「もつともなことだ」と訳す場合もある。ここでは、世間の人が、「思ふと、さいふとも、家にすゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ」と言っ

ていることに對して、「さること」だと言っているのである。世間の人の言っていることの内容は、男の二人の妻に對する態度で、「思ふと、さいふ」とは、直訳すると、「大切に思うと言つても、そのように言つても」となる。「思ふ」には「大切に思う」という意味があるので注意する。すなわち、男が口でいくら「大切に思う」と言つていても、と言っているのである。そして、次に「家にすゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ」というように、家にいるもとの妻を大切に思つてゐるのだらうと噂するのである。「やごとなし（＝やむごとなし）」は、「身分が高い」という意味もあるが、「大切に」という意味がある。したがつて、世間の噂の内容は、①男が口では大切に思うと言つてゐること、②結局は家にもとの妻が大切にしたいこと、の二点となる。解答は、この世間の人々の噂がもつともだということをし新しい妻の親が言つてゐるといふかたちでまとめればよい。

問4 〈指示語〉

「かく」は、男と新しい妻との間のここまでのいきさつ全般を指している。つまり、女の親が男に對して、自分の娘を男の家に住ませたいと迫つてゐることをここでは書かなくてはならない。男は、女の親に對して、「おろかにおぼさば、ただ今も渡したてまつらむ」と言つてゐるので、「新しい妻を自分の家に住ませると約束してしまった」でもよい。ただし、採点基準にも書いたように、「もとの妻に出て行つてほしいこと」「新しい妻がすぐに家に来ること」などは、結果として合つてゐるが、そこに至る状況を十分に説明してゐないので、減点となる。

現代語訳

下京のあたりに住んでゐる、身分が卑しくない人で、生活が思い通りにならない女性を憎からず思つて、長年共に生活をしてゐる間に、男は、

親しい人のところへ通う間に、その家の娘のことが好きになつて、こつそりと通ひ続けるようになった。目新しく感じられたからだらうか、初め妻としていた人よりは（新しい妻に對する）愛情が深く感じられて、今は人目も隠さず通つていたので、新しい妻の親が聞きつけて、「長年連れ添つた妻をお持ちだけれども、こうなつてはどうしようもない」と言つて、娘との關係を認めて通わせることにした。（その話を）もとの妻が聞いて、「今はもう最後であるようだ。（新しい妻の家では、男を新しい妻のところへ）通わせてなども、まさかいさせないだらう。」と思ひつづける。（もとの妻は）行くのによいところがあるといふなあ。（夫の態度が）すっかり冷淡になつてしまわぬうちに、離れてしまいたい」と思ふ。しかしながら、身を寄せるのによいところもない。新しい妻の親などは、強い態度で言うことは、「妻などがいない人で、ぜひにと言つた人に娘を嫁がせようと思つてゐたのに、このように不本意なたちで夫婦とおなじになつたのは、残念だけれども、どうしようもないので、このように娘のところに通わせ申し上げてゐるのに、世の中の人々は妻を家に住ませている人について、『大切に思うのであるだらう』などと言ふのもおもしろくない。本当に、噂の通り家においでゐるもとの妻を大切に思つてゐるのだらう」と言つたので、男は、「私は、一人前ではございせんけれども、（お嬢様に對する）気持ちだけは（私に）まさる人がいないだらうと思つてゐます。お嬢様を私の家にお移し申し上げないのを、いい加減な態度だと思ひになるならば、たつた今でもお移し申し上げよう。たいへん心外なお言葉でございませう」と言ふので、親は、「せめて言つたとおりのかたちだけでも実現なさってください」と、強い態度で言ふので、男は、「ああ、もとの妻をどこに行かせようか」と思はれて、心の中では悲しいけれども、新しい妻が大切なので、「このような事情だと言つて、様子なども見よう」と思つて、もとの妻の所へ行つた。

漢文編目次

第1回	漢董永、千乘人。	〔出典〕	〔は解説冊子の頁〕	〔出題大学〕
第2回	四月十日夜、樂天白。	〔搜神記〕	4	大阪大学
第3回	長樂公主將出降。	〔与微之書〕	6	神戸大学
第4回	季羔為衛之士師、	〔資治通鑑〕	8	東京大学
第5回	曹參代蕭何為漢相国。	〔孔子家語〕	10	名古屋大学
第6回	晋永嘉之乱、郡县無定主、	〔容齋統筆〕	12	東北大学
第7回	曹攄、字顔遠、譙国譙人也。	〔幽明録〕	14	九州大学
		〔晋書〕	16	北海道大学
			〔85〕	

第2回

「与微之書」白居易

★★☆

神戸大
解説
65ページ

25分

30点

次の文章は、中唐の詩人、白居易（七七二～八四六）が友人の元稹（七七九～八三二）にあてた手紙である。全文を読んで、問1～5に答えなさい（設問の都合で、返り点・送り仮名・振り仮名を省略した部分がある）。

四月十日夜、楽天白^{まうす}微^び之^{しヨ}微^ヨ之^{ルコト}、不^レ見^ル足^ニ下^ニ面^ヲ已^ニ三年矣、不^レ得^ニ足^ノ下^ノ書^ヲ一^ニ欲^ス二^ニ年^ニ一^ニ矣。人生幾何、離^リ闊^{くわつスルコト}如^レ此^ノ。況^{マシテ}以^テ膠^{かう}漆^{しつ}之^ヲ心^ニ置^キ於^ニ胡^こ越^{えつ}之^ニ身^ニ、進^{ミテハ}不^レ得^ニ相^ヒ合^フ、退^{キテハ}不^レ能^ハ相^ヒ忘^ル。牽^{けん}攀^{けん}乖^{くわい}隔^{かく}、各^①欲^ス白^キ首^ヲ。微^ヨ之^ヨ微^ヨ之^ヨ、如何^{セン}如何^{セン}。天^ニ実^ニ為^{サバ}之^ヲ、謂^{ハシ}之^ヲ奈^ト何^ト。僕^メ初^メ到^{リシ}二^ニ潯^{じん}陽^{やう}一^ニ時^ニ、得^{タリ}二^ニ足^ノ下^ノ前^ノ年^ノ病^ノ甚^{シキ}時^ノ一^ニ札^ヲ。又^{ミル}睹^ス所^ノ寄^{スル}聞^ク二^ニ僕^ノ左^ノ降^ヲ一^ニ詩^ニ云^フ上^ニ。

残^ク灯^{ほの}無^レ焰^{しょう}影^{しょう}憧^{しょう}憧^{しょう}

此^ノ夕^ノ聞^ク三^ニ君^ノ謫^{たくセラルルヲ}二^ニ九^ニ江^ニ一^ニ

垂^チ死^{セバ}、病^ノ中^ノ驚^キ起^{チテ}坐^{セバ}

閨^{くら}風^{キテ}吹^{キテ}レ^ヲ面^ヲ入^ル二^ニ寒^ニ一^ニ（A）^ニ

此句他人尚不可聞、況僕心哉。至^ル今^ニ每^{ズル}吟^{ナホ}猶^{ソク}惻^{ソクタル}惻^{のみ}耳。

(白居易「与微之書」より)

(注) ○樂天——白居易の字。 ○微之——元稹の字。 ○離闊——離れること。

○膠漆——にかわとうるし。転じてぴったりと寄り添っていること。

○胡越——北方の胡と南方の越。遠く離れていること。

○牽攀乖隔——互いに心はひかれていながら、離ればなれになっていること。

○潯陽——現在の江西省九江市。 ○一札——一通(の手紙)。

○憧憧——光や火かげがちらちらするさま。 ○惻惻——悲しみいたむさま。

問1 傍線部①「各欲白首」について、

1 すべて平仮名で書き下しなさい(現代仮名遣いでよい)。

2 現代語に訳しなさい。

問2 傍線部②「天実為之、謂之奈何」について二重傍線部の「之」の内容を明らかにしながら現代語に訳しなさい。

問3 「(A)」に入る一文字を、次の中から記号で選びなさい。

イ 戸 ロ 窓 ハ 門 ニ 枕

問4 傍線部③に「詩」とあるが、この詩が作られた時、

1 元稹はどんな状態にあったか、詩の中から四文字以内で抜き出さない(送り仮名、返り点は含まない)。

2 白居易はどんな状況にあったか、詩の中から四文字以内で抜き出さない(送り仮名、返り点は含まない)。

問5 傍線部④に「況僕心哉」とあるが、「僕」はどんな心情だったのか、詩の内容を踏まえて八〇字以内で答えなさい。

漢文編2

『与微之書』
白居易

得点

点

問
1

1

--	--

問
2

1

問
3

11

問
4

1

2

問
5

[illegible]

漢文編2 『与微之書』 白居易

解 答

問1 1 おのおのはくしゆならんとほつす。

2 二人とも白髪頭になろうとしている。

問2 天が本当に我々に会いたくても会えないという状況を与えたならば、これをどうすることもできないな。

問3 ロ

問4 1 垂死病中 2 (君) 謫九江

問5 瀕死の病中にある親友元稹が、白居易が左遷されたという報を知って、いよいよ命の火も消えてしまいそうだとばかりに悲しんでいることに、この上なく心をいためている。(78字)

配点・採点基準

30点

問1 〈各4点〉

1 ◇4点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。
一つ間違いがあれば2点。二つ以上間違いがあれば0点。

*「各」を、副詞として「おのおの」と読めている。

*願望形の「欲」を、「〜んとほつす」と読めている。

*その他の部分に誤りがない。

2 ◇4点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。
一つ間違いがあれば2点。二つ以上間違いがあれば0点。

*「各」を、「二人とも、それぞれ」のように適切に言い換えて訳している。
 *願望形の「欲」を、「〜になろうとしている」のように適切に訳している。
 *「白首」を、「白髪頭」のように適切に訳している。

問2 〈6点〉

◇6点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。一つ間違いがあれば4点。二つ間違いがあれば2点。三つ以上間違いがあれば0点。

*「之」の内容を、「二人(我々)が会いたくても会えないという状況を」のように、適切に明らかにしている。

*「天実為」を、「天が本当に〜をしたならば」のように適切に訳している。

*「謂之奈何」を、「これをどうすることもできない」のように適切に訳している。

問3 〈4点〉

*正解の「ロ」が選んでいるものを4点。それ以外は0点。

問4 〈各3点〉

1 ◇「垂死病中」を抜き出しているものを3点。それ以外は0点。

2 ◇「(君) 謫九江」を抜き出しているものを3点。それ以外は0点。

問5 〈6点〉

◇6点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。一つ間違いがあれば4点。二つ間違いがあれば2点。三つ以上間違いがあれば0点。

*「瀕死の病中にある親友元稹が、命の火も消えてしまいそうだとばかりに悲しんでいる」ことへの言及がある。

*そのきつかけが、「白居易が左遷されたという報を知った」ことである点への言及がある。

*白居易が「この上なく心をいためている」ことへの言及がある。

出典

白居易の「与微之書」(微之に与ふる書)より。

白居易と友人の元稹は中唐を代表する詩人であり、強い友情で結ばれていた。二人の友情がテーマになる詩はそれぞれにたくさん作られており、入試でもしばしば採り上げられている。白居易の「与微之書」は、類出するものの一つである。

文章に漢詩が引用されての出題なので、どちらを考える際にも相互に対応させつつ解釈を定めていくことが大切である。

解説

問1 〈書き下しと現代語訳〉

1 「各」は、現代語でも使われている副詞で「おのおの」。

「欲」には、「ほつす」と読む動詞の場合と、動詞から返って「〜んとほつす」と読んで「a〜したいと思う、bいまにも〜しようとしている」のように訳す願望の形の場合とがある。一般に設問として採り上げられるのは後者である。

ここは、「いまにも白髪頭になろうとしている」(右記bの解釈で、再読文字の「将」と同様な働きをしているケースである。これをaの解釈で「白髪頭になりたいと思う」のように訳すのはオカシイ)の意味である。よって「白首」を動詞として読んで未然形に直し、意志・推量の助動詞「ん」に接続させて読まなければならない。名詞を動詞として読むときには、断定の助動詞「なり」を補って読むのが原則なので、「はくしゆなり」を未然形に直して「はくしゆならんとほつす」と読むことになる。

二行目の「欲二年」が同様の表現なのでここに着眼して解答することも大切である。

以上をまとめて、「おのおのはくしゆならんとほつす」のように解答できれば正解である。

2 右記1の解説に示した読み方に従って、「二人とも白髪頭になろうとしている」のように訳せばよい。

漢文で出会う「首」は、現代語の「くび」ではなく「あたま」である。類出名詞なので覚えておきたい。もちろんここでも「白い首」では意味をなさない。「白髪頭」だからこそ二人とも老いを感じて、会えないことがより一層つらく思われるのである。

問2 〈指示語を具体化したの現代語訳〉

設問の条件の「之」は、冒頭「微之微之」から傍線部①の「各欲白首」までをまとめることになる。(注)に従って解釈してみるが、要するに「二人(我々)が会いたくても会えない」という趣旨のことを繰り返している部分である。これを示す。

前半の「天実為之」は、「天が本当に『之』をしたならば」↓「天が本当にこの状況をもたらしただらば」「天が本当にこんな運命を(我々に)もたらしただらば」のように訳せる。

「奈何」は、直前部の「如何」と同じく「いかにせん」と読んで「どうしようか」(疑問)「どうしようもない」(反語)のように訳すのが原則である。ここは前半の「天実為之」をふまえて、「謂之奈何」を「これをどうしようと言うのか↓どうすることもできない」のように反語で訳すことになる。読み方は、「謂之奈何」の四文字で「之を奈何せんと謂ふ」、または「之を奈何と謂はん」。

以上をまとめて、「天が本当に我々に会いたくても会えないという状況を与えたとすれば、これをどうすることもできないな」のように解答すれば完了。

問3 〈空欄補充〉漢詩の規則・押韻

漢詩の句末の空欄補充は、まず押韻を検討する。偶数句末に押韻するが、一句が七文字の七言詩は第一句末も押韻する原則である（ただし、七言詩は第一句末は押韻しないこともある）。ここは「懂shou」「江kou」と押韻しているので、空欄には「ou」という音を持つ文字が入る。それは選択肢の中の「窓sou」しかない。「まど」などと訓読みしないように注意しよう。「同窓」のように熟語に置き換えて、音読みを比較すること。

問4 〈抜き出し〉

まず、傍線部の前の二文を正しくとらえて、これを詩の内容と結びつける。「潯陽」の（注）に「九江」とあることから、「僕」＝白居易が「潯陽」＝「九江」に「左降」＝「謫」（左遷）されていたものと把握する。そして「足下」（二人称代名詞）＝元稹が「病甚」＝「垂死病中」という状況にあったものと把握する。

1 右記のとおり、文中の「足下前年病甚」が詩中の「垂死病中」と結びつく内容なので、これを抜き出せばよい。

2 右記のとおり、文中の「僕初到潯陽」が詩中の「君謫九江」と結びつく内容なので、これを抜き出せばよい。四字以内という指定があるので、こちらは「謫九江」の三字でも正解となる。

問5 〈内容説明〉

まず、傍線部を含む文を、抑揚形を構成していることをふまえて訳してみる。「この句は他人でさえ聞くことはできない、まして僕の内にとつてはなおさらだ」。そして次の一文、「今になっても口ずさむたびにまだ悲しみいたんでいるのだ」。この文の「惻惻」の（注）「悲しみいたむさま」は、心情の説明としては大変に貴重な情報となる。以上から、詩を読んだ「僕」が、ひどく悲しみをいためていることが

確認できる。

詩の内容については、問4とのつながりに着眼してポイントをおさえる。元稹は「垂死病中」（瀕死の病中）であり、それを第一句では「風前のともしび」のようにたとえている。白居易の「謫九江」（九江への左遷）のニュースを知った元稹は、「（風前のともしびに）風が吹き付けて（命の火も消えてしまいそうだ）」と言っている。

以上をまとめて、「瀕死の病中にある親友元稹が、白居易が左遷されたという報を知って、いよいよ命の火も消えてしまいそうだとばかりに悲しんでいることに、この上なく心をいためている。」のように解答する。

読み方

四月十日夜、楽天白す。微之よ微之よ、足下の面を見ざることに已に三年、足下の書を得ざること二年にならんと欲す。人生幾何ぞ、離闊すること此のごとし。況して膠漆の心を以て、胡越の身に置き、進みては相ひ合ふを得ず、退きては相ひ忘る能はず。牽攀乖隔し、各自首ならんと欲す。微之よ微之よ、如何せん如何せん。天実之を為さば、之を奈何と謂はん。僕初めて潯陽に到りし時、足下の前年病甚しき時の一札を得たり。又寄する所の僕の左降を聞くの詩に云ふを睹る。

殘灯焰無く影憧憧

此の夕君の九江に謫せらるるを聞く

垂死の病中驚き起ちて坐せば

闇き風面を吹きて寒窓に入る

此の句他人すら尚ほ聞くべからず、況や僕の心をや。今に至るまで吟ずる毎に猶ほ惻惻たるのみ。

通 訳

四月十日夜、私樂天が申し上げます。微之君、微之君、君の顔を見なくなつてから、もうすでに三年になり、君から手紙をもらわなくなつてから、二年になろうとしている。人生はそう長くない、それなのにこんなに御無沙汰しなければならないとは。まして固い友情に結ばれたわれわれ二人が遠く離れていなければならない。進んで会おうとしても会うことができず、退いて忘れようとしても忘れることができず、互いに心はひかれながら、身は離ればなれで、二人とも白髪頭になつてしまおうとしているのだ。微之君、微之君、いったいどうしたらよいのか。天命が本当に（二人を）こうさせているからには、これをどうしたらよいと言うのか（どうすることもできないな）。僕が潯陽に到着したばかりの時、君が去年重体におちいった時の手紙を手にする事ができた。また送っていたいただいた「私が左遷されたことを聞く」という詩に書かれているのを見ると、

消えかかったともしびの火影はゆれて定まらず、

今夜、君が九江へ左遷されたことを聞いた。

瀕死の病中、驚いて起き上がり座りなおすと、

闇の中を、風が私の顔を吹きつけて寒々とした窓から吹き込んでくる。

この詩は悲しくて他人でさえも聞くことができない。まして僕の気持ちはおおさらだ。今でもこの詩を吟ずるたびに、やはり悲しくて心がいたむ。